

# 日本農林漁業振興会会長賞受賞

「山・川・緑に人の愛」を合言葉に自然と人との絆によるむらづくり

くぶきくこうみんかん  
受賞者 久富木区公民館

かごしまけんさつまぐん ちょう  
(鹿児島県薩摩郡さつま町)

## ■ 地域の沿革と概要

さつま町は、鹿児島県の北西部に位置し、県都鹿児島市から北に約50km離れた面積約303km<sup>2</sup>、人口約24,000人(約9,900世帯)の町であり、平成16年度に3町(宮之城町、鶴田町、薩摩町)が合併して誕生した。

町の北部には標高1,067mの紫尾山がそびえ、南九州一の河川規模を誇る川内川が北から南へ流れている。川内川流域には市街地や農地が広がり、その周りを山林が囲んでいる。特に、孟宗竹林は全国有数の面積を誇り、日本一の早堀りたけのこの産地となっているほか、日用品や贈答品の材料の原産地でもある。また、水稻、南高梅、果樹、お茶等の栽培も盛んに行われている。

さらに、本地域は全国に誇る優良牛の産地である。和牛の改良に多大な貢献をした種雄牛「平茂勝」は平成2年に本地域で誕生したものであり、現在も平茂勝の優れた遺伝的能力を受け継ぐ種子牛が多数、育成されている。

## ■ むらづくりの概要

### 1. 地区の特色

久富木区は、さつま町の南端(役場から約8km)にある旧宮之城町に属し、薩摩川内市と隣接する5集落・人口約700人(約300世帯)の地区であり、水稻、たけのこ、畜産等が盛んである。地区には、川内川支流の一級河川久富木川が流れ、流域には水

第1図 位置図



第1表 地区の概要

事項	内容	
地区の規模	集落の集合体	
地区の性格	地縁的な集団等	
農家率 (内訳)		39.9%
	総世帯数	303戸
	農家数	121戸
販売農家数 (内訳)		121戸
	専業農家	40戸
	1種兼農家	22戸
	2種兼農家	59戸
主要作物 (農業産出額)	水稻	113(百万円)
	茶	18(百万円)
	肉用牛繁殖	109(百万円)
農用地の状況 (内訳)	耕地計	148ha
	田	91ha
	畑	41ha
	樹園地	15ha
	耕地率	15.2%
	農家一戸当たり農用地面積	1.2ha

田等が広がり、周囲は、西に牧之峯、北に高倉山等の尾根群、南東には藺<sup>いむた</sup>牟田連山と、町の中心部とは、川と山々で分断された地理的条件となっている。

## 2. むらづくりの基本的特徴

### (1) むらづくりの動機、背景

久富木区では、昭和の後半に地区内のコミュニティを維持していく上で貴重な公共施設であった小学校分校と鉄道駅をそれぞれ廃校及び路線の廃止に伴う閉鎖という形で相次いで喪失し、深刻であった過疎化・少子高齢化の問題と相まって住民の間には重い閉塞感が漂うこととなった。

一方、鹿児島県では、昭和52年度から農村集落の自主的な話し合いによる自立自興のむらづくりを推進する「農村振興運動」が開始され、各地で活動の機運が高まっていた。

平成5年度からは、熱意のある推進地区を知事が重点地区に指定する等の規定を追加した「新・農村振興運動」として再スタートし、むらづくり計画の作成とその実践を推進すると、久富木区でも住民に漂う閉塞感から脱却すべく、本運動を活用した地域活性化に取り組むことを決め、意欲的な話し合いを開始した。行政や施設に依存することなく自然と人との絆によるむらづくり活動を模索した結果、平成7年度に「みんなで考え、みんなで興し、みんなで拓くむらづくり」と「山・川・緑に人の愛」を合言葉とした「久富木地区地域づくり活性化計画」の策定に至った。平成9年度には、悲願であった久富木区公民館の完成により5集落が共に話し合い、共に活動していく拠点が完成し、当時の公民館長であった末永忍氏のリーダーシップの下、地区が抱える過疎化・少子高齢化の課題に対して真剣に向き合い、さらなる活動に取り組み始めた。

その後、水田農業への取組、直売所の運営、人材発掘・美しいふるさとづくり等の活動を活発に行っており、特に、平成11年度に開始した住民の健康づくりを目的とした「びんコロ会」は、地区の愛称である「久富木びんコロ村」のネーミングの基となったものである。元々は、長野県で行われていたピンピンコロリ(病気に苦しむことなく元気に長生きし、病まずにコロリと逝こうという意味)の取組を取り入れたものであるが、「元気でびんびん働けば収入もコロがりこんでくる」という久富木区独自の願いを込めた解釈が名前の由来となっている。

### (2) むらづくりの推進体制

「久富木地区地域づくり活性化計画書」は、平成7年度から5年毎に見直しを行ってきたほか、普段の活動においても「企画→実行→見直し」を図る体制を構築している。

#### ア 久富木区会

久富木区は、公民館長(以下、「館長」という。)や5公民会長(集落代表)のほか、民生委員やPTA役員、農業委員、土地改良区理事等、地区で様々な役職等に就く者延べ90人を



写真1 久富木区公民館の皆さん

「区会議員」に委嘱し、公民館の運営を執行している。

#### ① 役員会と4専門部会

公民館には、館長をはじめとする延べ18人の「役員会」と4つの「専門部」（産業部・女性部・環境部・体育部）を設置し、公民館の企画及び事業の執行にあたっている。

#### ② プロジェクトチーム

館長は、様々な活動を考案する久富木区のアイデア集団「プロジェクトチーム(以下、「PT」という。）」を設置し、「企画広報会議」において年間計画等を協議するほか、産業・生活・環境等の分野でPTを設置して、企画作りを行っている。

#### ③ 住民への周知

区会議員制により住民の多く(延べ約90名、総世帯数の約1/3)がむらづくり活動に参加しているが、それ以外の住民へも地区コミュニティ誌「久富木区新聞」を毎月配布し、協議の状況や計画等を掲載することにより、活動の周知を図っている。

#### ④ 地域担当職員制度

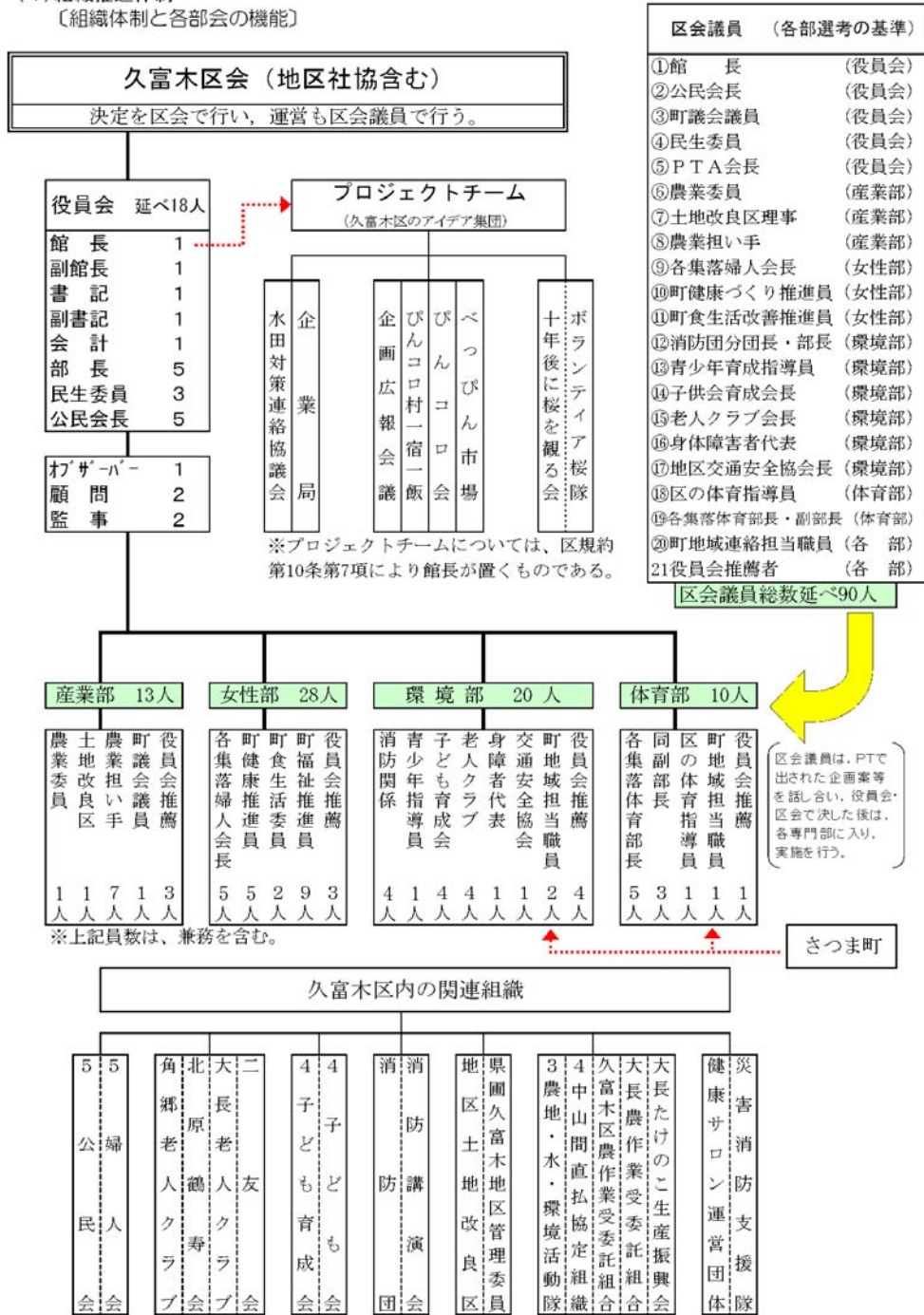
町は、公民館のむらづくり活動を支援するため、平成7年度から補助金を交付しているが、その執行管理のために、主に地元出身の町職員を公民館専門部に配置する「地域担当職員制度」を実施している。

担当職員は、地区の計画策定やイベント実施等に協力し、地区活動を通じた職員の資質向上とともに、将来の地区リーダー育成にも寄与している。平成23年度より館長になった満留民雄氏も初代地域担当職員であり、この経験がむらづくりに取り組むきっかけとなっている。

## 第2図 むらづくり推進体制図

### (4) 組織推進体制

〔組織体制と各部会の機能〕



## ■ むらづくりの特色と優秀性

### 1. むらづくりの性格

#### (1) 行政や施設に依存せず、自然と人との絆によるむらづくり

久富木区は、行政や施設に依存することなく、「山・川・緑に人の愛」の合言葉の下、地区にある久富木川や山々、水田等の素晴らしい自然を活用した都市農村交流活動等、自然との絆によるむらづくり活動を積極的に行っている。

また、地区の人材の評価や久富木区にルーツをもつ全国の久富木さんとの交流等、人との絆によるむらづくり活動を行っている。

## (2) 多くの人が参加する「企画→実行→見直し」による推進体制

役職等に就く地区住民を区会議員に委嘱して話し合いを促し、また、久富木区新聞を全戸に配布する等、むらづくりに多くの人が関わる体制を構築している。「企画→実行→見直し」を行い、成功も失敗も住民自らが評価・反省し、次へと進むむらづくりを展開している。

## (3) ユニークなネーミングによる活動と情報発信

都市農村交流や人材発掘等の様々な活動にユニークなネーミングを付けており、住民が楽しく活動するだけでなく地区外へのPRも意識した活動を行っている。また、久富木区新聞の郷土出身者への配布等、幅広く情報発信を行っている。

## (4) 逆転の発想、良いものは取り入れる精神

農村部が抱える過疎化・少子高齢化の課題に対し、高齢でも元気な地区を目指して「久富木ぴんコロ村」の愛称を付ける等、地域の課題に逆転の発想で取り組んでいる。また、他地域での取組を参考にPTにおいて事例等の収集・検討を重ね、本地区に必要なものは、積極的に取り入れたむらづくりを展開している。

## 2. 農業生産面における特徴

### (1) 水田農業の取組状況

久富木区では、平成11年度に地区の北部地域において「久富木地区農作業受委託組合防除班」を設立し、平成13年度には、田植え・稲刈り作業も受託する「久富木地区農作業受委託組合」へ拡充して、現在約20haを受託している。平成18年度には、南部の大長集落でも「大長地区農作業受委託組合」を設立し、中山間地域等直接支払や農地・水・環境保全向上対策も導入し、農村環境保全や耕作放棄地の発生防止に積極的に取り組んでいる。

### (2) 県有数の優良たけのこの産地

久富木区は、町有数の竹林面積を誇り、たけのこ生産が盛んである。

特に大長集落では、昭和36年に大長たけのこ生産振興会を設立し、定期的な話し合い活動や研修等による技術向上を図りながら、早掘りたけのこの生産に力を入れており、県林業技術競技会で最優秀賞を4回受賞する等優良産地となっている。

### (3) 久富木区運営直売所「べっぴん市場」

平成18年度に、地区内の県道沿いに久富木区の「別格の品物」を売るという意味から名付けた久富木区運営の直売所「べっぴん市場」を開設した。

当初約30名であった出品者は、現在約40名となり、農林産物や婦人会の加工品、久富木川の水産物等を出品し、地区で生産した野菜や米等の販路拡大とともに、市場に集う

高齢農家の生きがいがいづくりにも寄与している。

#### (4) 「久富木れんげ米」と米菓子「むらおこし」

米価低迷の中、久富木区で生産した米をより有利に販売するため、田んぼで咲いたレンゲを緑肥として鋤き込んだ減農薬米を「久富木れんげ米」とネーミングし、オリジナル米袋を作成して、べっぴん市場での販売や郷土出身者等への通信販売を行っている。

また、米の加工品として米菓子「むらおこし」を販売する等、米離れが進む中での消費拡大に向けて、地区で独自にできることを考え、前向きに取り組んでいる。



写真2 べっぴん市場

### 3. 生活・環境整備面における特徴

#### (1) 「久富木区新聞」の発行

久富木区が県の「新・農村振興運動」の重点地区に指定されたことを契機に、「久富木区新聞」の第1号が平成7年7月7日に発行された。

毎月1回の発行を重ね、現在では200号を目前にしている。むらづくり活動の各種協議状況や計画を掲載することにより、住民への周知、合意形成等に大きな役割を果たしているほか、活性化に努力してきた地域の貴重な資料となっている。

また、年2回、地区出身者にも送付しており、出身者の愛郷心をつなぎ止め、新たな絆づくりにも大きく貢献している。

#### (2) 人材発掘の取組『おはんが<sup>あなた</sup>一番久富木大賞』

地区では、個人の良いところをみんなで認めることで向上心を育み、それが優れた人材やリーダーの発掘につながると考え、様々な一番を「クブキブック」に登録する「おはんが一番久富木大賞」を開催している。

この取組は、4年に1度実施していることから、地元では「人材オリンピック」とも称されており、これまで延べ67人が認定されている。

#### (3) 高齢者の健康づくり「ぴんコロ会」と明日を担う子どもたちの育成

P T 「ぴんコロ会」では、高齢者が元気であるよう健康への意識向上を図っている。

また、地域で子どもたちを育む活動にも取り組み、登校時の同伴ウォーキングや下校時の安全パトロールを行っているほか、久富木川源流ウォーキング等を実施している。

平成18年度からは高校生24名で高校生クラブを組織し、さつま芋の生産等の農業体験を行い、収穫した芋から作った焼酎「久富木」は彼らが成人した際に贈呈されている。

#### (4) 都市農村交流「めだかの田んぼ・かけぼし米オーナー制度」と「久富木ぴんコロ村一宿一飯活動」

久富木米の消費拡大と「さつま町ではすんくじら(隅っこ)でも鹿児島市に一番近い田舎・久富木」を売り込むため、めだかが泳ぐ川の水で米を作る「めだかの田んぼ・かけぼし米オーナー制度」を平成13年から開始し、減農薬米の田植えや稲刈り、さつま芋堀り等の農業体験、久富木川での魚釣り体験等を毎年実施し、平成17年までに393人を受け入れている。

平成18年度からは、さらなる地区の活性化や住民の所得向上を目指し、これまでの日帰り交流から発展した「久富木ぴんコロ村一宿一飯活動」を開始した。農業体験や自然体験、田舎料理づくり体験等を行った後、夜は公民館において交流会を行い、地区住民の家庭で宿泊してもらう活動を実施し、これまでに41組101名の参加を受け入れている。



写真3 久富木区ぴんコロ村一宿一飯活動

#### (5) 美しいふるさと久富木づくり「十年後に桜を観る会」

平成11年には、地区の活性化のため、千本の桜の植樹を目指したPT「十年後に桜を観る会」を立ち上げ、「久富木区新聞」への掲載等により桜の苗代の寄付を募ったところ全国から700人以上の賛同を得て、目標より早い4年間で道路沿いや久富木城跡に1,064本の植樹を達成した。平成15年には「ボランティア桜隊」を結成し、桜の管理を中心に、道路河川の清掃等、地区内の環境保全に取り組んでいる。

これらの取組から、平成20年に財団法人日本さくらの会から「さくら功労者」として表彰を受けた。



写真4 地区内に植樹された桜

#### (6) 地域の環境保全への取組

道路沿いのゴミのポイ捨て対策として、平成19年から道路沿いに鳥居を設置する「小さな赤い鳥居作戦」を開始している。

また、環境保全等のボランティア活動が持続するように、活動に係る各自の費用を地域通貨「ユイ券」(1ユイ=1円)で還元して地区内の商店でも利用できるようにし、活動の継続と商店の維持にも寄与している。

#### (7) 郷土関係者との交流「全国の久富木さんは久富木に行こう」

平成8年から「帰ってこいよ・連れてこいよ運動」と称した地区出身者との交流会を

開始する等、出身者の愛郷心をつなぎ止める活動を行っており、「十年後に桜を観る会」の活動により地区外の久富木さんとのさらなる関わりが生まれてきた。

平成21年には、荒れていた久富木城跡を公園として再生し、県内の久富木さんと住民が協働で階段整備や桜の植樹を行った。平成22年には、県外の久富木さんとの交流を目的とした「全国の久富木さんは久富木に行こう」ツアーを実施した。

当日は、遠く神奈川県や愛知県等の久富木さんも参加し、寄贈された桜を植樹したり、また、夜は公民館で焼酎「久富木」を飲みながら郷土の遊びである薩摩ナンコに興じたりと、短時間ではあったが楽しい一時を過ごし、「久富木びんコロ村」のむらづくりの一つの集大成の場面となった。